

経つくゑ

樋口一葉

青空文庫

あはてむけはな
 哀れ手向の花一枝に千年のちぎり萬年の情をつくして、誰れに
 みさをみ
 操の身はひとり住、あたらし美形を月花にそむけて、世は何時ぞ
 し
 とも知らず顔に、繰るや珠數の緒の引かれては御佛輪廻にまよ
 がほ
 ひぬべし、ありしは何時の七夕の夜、なにと盟ひて比翼の鳥の片
 たは
 羽をうらみ、無常の風を連理の枝に憤りつ、此處閑窓のうち
 むじよう
 きじやう
 机上の香爐に絶えぬ烟りの主はと問へば、答へはほろり襦袢
 かうろ
 た
 けふ
 ぬし
 と
 こた
 じゆばん
 そで
 つゆ
 お
 い
 すぜう
 き
 むり
 あら
 の袖に露を置きて、言はぬ素性の聞きたきは無理か、かくすに顯
 つね
 はるゝが世の常ぞかし。

さすれば夢のあともなければ、悟らぬ先の誰れも誰れも思ひを寄
 せしは名か其人か、醫科大學の評判男に松島忠雄と
 呼ばれて其頃二十七か八か、名を聞けば束髪の薔薇の花やが
 て笑みを作り、首卷のはんけち俄かに影を消して、途上の默
 禮とも千歳の名譽とうれしがられ、娘もつ親幾人に仇敵
 の思ひをさせて我が賀がねにと夫れも道理なり、故郷は静岡の
 流石に士族出だけ人品高尚にて男振申分なく、才あり
 學あり天晴れの人物、今こそ内科の助手といへども行末
 の望みは十指のさす處なるを、これほどの人他人に取られて成る
 まじとの意氣ごみにて、賀さま拂底の世の中なればにや華族
 の姫君、高等官の令嬢、大商人の持參金つきなど彼

れよ是れよと申込みの口 《くち／＼》より、小町が色を衒ら
 ふ島田髷の寫眞鏡、式部が才にほこる英文和譯、つんで
 机上にうづたかけれども此男なんの望み有りてか有らずか、
 なかうども、仲人が百さへづり聞ながしにして夫れなりけりとは不審しから
 ずや、うたがひは懸かる柳闇花明の里の夕べ、うかるゝ先き
 の有りやと見れど品行方正の受合人多ければ事はいよいよ
 闇黒になりぬ、さりながら怪しきは退院がけに何時も立寄る
 某れの家、雨はふれど雪は降れど其處に轅棒おろさぬ事なしと
 口さがなき車夫の誰れに申せしやら、某から某と傳はりて想像
 のかたまりは影となり形となり種々の噂となり、人知れず氣
 をもみ給ふ御方もありし、其中に別けて苦勞性のあるお人

しのびやかに跡あとをやつけ給たまひし、探さぐりに探さぐれば扱さても燈臺とうだいの
 もと暗くらさよ、本郷ほんごうの森川町もりかはちようとかや神社じんじやのうしろ新坂しんざか
 通どほりに幾構いくかまへの生垣いけがきゆひ廻まわせし中なか、押をせば開ひらく片折戸かたをりど
 香月かうづきそのと女名をんなまへの表ひようさつ札をりくかけて折々こともる、琴のし
 のび音ね、軒端のきばの梅うめに鶯うぐひすはづかしき美音びおんをば春はるの月夜つきよのおぼろげに
 聞きくばかり、ちらり姿すがたは夏の簾すだれごし憎にくくや誰たれゆゑ惜をしみてか藥や
 師くしさまの御縁日ごゑんにちにそゞろあるきをするでもなく、人ひとまち顔がほの立た
 姿すがたかどに拜おがみし事こともなければ美人びじんと言いふ名なこの近傍かいわいにかく
 れなしと聞きくは、扱さてこそ彌々いよく學士がくしの外妾かこいか、よしや令嬢れいちよう嬢ぶ
 ればとてお里さとはいづれ知しれたもの、其様そんなものに鼻毛はなげよまれて果はて
 は跡あとあしの砂すなの御用心ごようじんさりとはお笑しょうし止しやなど、憎にくくまれ口ぐち

いひちらせど眞しんの處ところは妬ねたし妬ねたしの積つもり、かゝる人々ひと／＼の瞋しん恚いの
 ほむらが火柱ひばしらなど、立昇たちつて罪つみもない世せ上じやうをおどろかすな
 るべし。

二

黒くろぬり堀べいの表おもてかまへとお勝手かつてむきの經けい濟ざいは別べつものぞかし、推をは
 かりに人ひとの上うへは羨うらやまぬ物ものよ、香月かうづき左門さもんといひし舊きう幕ぼく臣しん、彼か
 の學士がくしの父親ちやうおやとは、の肩かたをならべし間あいだなるが、維新いしんの變へんに
 彼かれは靜岡しづをかのお供とも、これは東臺とうだいの五月雨さみだれにながす血汐ちしほの赤あかき
 心こゝろを首尾しゆびよく顯あらはして露つゆとや消きえし、水みづさかづきして別わかれし限ぎり

の妻^{つま}へ形^{かたみ}見^みが此^{この}美^び人^{じん}なり、人^{ひと}の不^ふ幸^{こう}は生^うれな^まがらに後^ご家^けさまの
 親^{おや}を持^もちて、すがる乳^{ちぶ}房^{ふさ}の甘^{あま}へな^まがらも父^{ちち}といふ味^{あぢ}夢^{ゆめ}にも知^{しら}ず、
 物^{もの}ごゝろ知^しるにつ^にけて親^{おや}といへば二^{ふた}人^{たり}ある他^{ひと}人^とのさ^まの羨^{うら}やまし
 さに、いとしき事^{こと}とひか^いけては幾^{いく}度^た母^{はは}の袖^{そで}し^はばらせしが、その
 母^{はは}にも又^{また}十^{じゅう}四^しといふとし果^は敢^{かん}なく別^{わか}れて今^{いま}は身^み一^{いっ}つ^ぱのいたはしき、
 か^がの學^{がく}士^しど^の其^{その}病^{びやう}床^{しょう}に不^ふ圖^とまね^なか^かれて盡^{じん}力^{りよく}したるが原^{もと}
 因^ととなり、くり返^{かへ}す昔^{むか}しのゆかりも捨^すてがたく、引^ひつゝいて行^{ゆき}
 通^ひしけるが、見^みるにも聞^きくにも可^か愛^{あい}想^{さう}なり氣^きのどく^どなり、こ
 れが若^もしもお俠^{きや}娘^{むすめ}の飛^とびかへりなどならば知^しらぬ事^{こと}、世^よといは
 る門^{かど}の戸^との外^{ほか}をも見^みず、母^{はは}さまとな^らではお湯^ゆにも行^ゆかじ、觀^{かん}
 音^{おん}さまのお參^{まゐ}りもいやよ、芝^{しば}居^ゐも花^{はな}見^みも母^{はは}さま御^ご一^{いっ}處^{しょ}ならでは

と此この一トもとのかげに隠かくれて、姿なりこそ嶋田しまだの大人をとなづくらせたれ
 ど正しょうとの處ところは人にんぎやう形かたちだいて遊びあそびたきほどの嬰兒ねえさまが俄にはかに落おちし
 木きの下したの猿さる同どうやう、涙なみだのほかに何なんの考かんがへもなくお民たみと呼よぶ老婢はしため
 の袖そでにすがつて、私わたししも一處しよに棺かんに入れよとて聞ききわけもなく泣な
 き入りし姿すがたのあくまであどけなきが不慙ふびんにて、素もとより誰たれたのま
 ねば義務ぎむといふ筋すぢもなく、恩おんをきせての野心やしんもなければ夫それより
 以來いらいの百事ひやくじ萬端ばんたん、身みに引ひうけて世話せわをすること眞しんの兄弟けうだいも
 出來できぬ業わざなり、これを色眼鏡いろめがねの世よの人ひとにはほろ酔よひの膝ひざまくらに
 耳みみの垢あかでも取とらせる處ところが見みゆるやら、さりとは學士がくしさま冤罪えんざいの
 訴うったへどころもなし。

今いまの世よの女子ぢよしき教育きやういくを賛成さんせいといひがたき心こころよりお園そのにも學がく

校がよひ爲せたくなく、廻り路でもなき歸宅がけの一時を此
 家に寄りては讀書算術、思ふやうに教へて見れば記憶もよ
 く分りも早く、學士はいよく可愛がりしが、お園すこしの感じ
 もなく、有がたし嬉しなど口の先に出すどころか顔を見るさへ嫌
 やがりて、日 《にちく》の稽古にも書物の事より外に問ふ
 ことの無きは勿論、返來をさへ打とけて言ひし事はなく、強て
 問へば泣き出しさうな景色を見るお民きの毒さかぎりなく、何歳
 までも嬰兒さまで致しかたが御座りませぬ、流石に氣のおけるお
 他人には少し大人らしくお成り遊ばせど、お心 安だての我ま
 いか、甘へ氣味である通りの御遠慮なさ、ちと御呵り遊ばして
 下さりませと極り文句に花を持たすれど學士は更に氣にも止めず、

その幼おさなきが尊たつときなり、反はん對たいに跳はねかへられなばお民たみどのにも
 療り治ようぢが六ツかしからん、園そのさま我われに遠ゑん慮りよは入いらず、嫌いやな
 時ときは嫌いやといふがよし、我われを他た人にんの男をとこと思おもはず母は様さま同どうやう甘あま
 へ給たまへと優やさしく慰なぐさめて日ひ毎ごとに通かよへば、なほさら五月うるさ蠅いとく厭いとはし
 く車くるまのおとの門かどに止とまるを何なによりも氣きにして、それお出いでと聞きがいな
 や、勝かつ手てもとの筭はうきに手て拭ぬぐをかぶらせぬ。

三

お民たみは此この家やに十ねん年ねんあまり奉ほう公こうして主しゅ人じんといへど今いまは我わが子こに
 替かはらず、何なにとぞ此この人ひとを立り派っぱに仕しあげて我われも世せ間けんに誇ほこりたき願ねが

ひより、やきもきと氣を揉むほど 何 心なきお園の体のもどか
しく、どうした物と考へ、困つたものと歎き、はては意見に小言
を交せて或る日さまざま言ひ聞かせぬ。

何時かは言はふと存じたれど、お前さまといふ御人には呆れます
る、是れが五つや十の子供ではなし、十六といへばお子様もつ人
もありますぞや、まあ考へて御覽なされお母様がお病没から
此かた、足かけ三年の長の間に松島さまが何れほど盡して下さ
れたと思しめす、私しでさへ涙がこぼれるほど嬉しきにお前さま
は木か石か、さりとは不人情と申ものなり、お覺えがある筈な
れど一々申さねばお分りになるまじ、お身寄り便りのなきお前さ
まの身を案じて、人は教へが肝賢のものなるに言はゞ園さまな

どは今いまが白糸はくし、何なんの色いろにも染まりやすければ、學校がくかうかよひに宜よ
 からぬ友ともでも出來できてはならず、一切さいわ我れに任まかせてまあ見て居いて
 くれと親切しんせつに仰おつしやつてお師匠し、ようさまから毎まい日にちのお出稽古でげいこ、
 月謝げつしゃを出だして附つけ居とゞけて御馳走ごちそうして車くるまを出だして、あがめ奉たてまつる
 先生せんせいでも雪ゆきや雨あめには勿論もちろんの事こと、三度どに一度どはお斷ことわりが常つねのも
 のなり、それを何なんぞや駄々だだつ子こ様の御機嫌ごきげんとり／＼、此本このほん一
 冊さつよみ終おはらば御褒美ごほうびには何なにを參まいらせん、手てならひが能よく出來できたれ
 ば此この次つきには文ふみを書かき見みせ給もつたいへと勿体もつたいない奉書ほうしようの繪半切えはんき
 れを手遊おもちゃに下くだされた事忘ことわすれはなさるまい、斯かう申おぼさばお前まへさま
 のお心こゝろには何なんの彼あんな物ものたゝきつけて返かへしたしと思おぼしめすか知しら
 ねど、紙かみ一枚まいにも眞實まことのこもるお志こゝろざしを頂いたゞく物ものぞかし、其御恩そのごおん

を何^{なん}とも思^{おも}はず、一年^{れん}といふ三百六十五日打^{うち}通^{とほ}して、好^いい顔^{かほ}ど
 ころか普^{あたりまへ}通^{あつ}の暑^{あつ}い寒^{さむ}いも満^{まん}足^{ぞく}には仰^{おつ}しやらず、必^{ひつ}竟^{きやう}あ
 の方^{かた}なればこそお腹^{はら}もたてず氣^きにも懸^かけず可^{かわ}愛^{あい}がつて下^{くだ}さるもの
 、第^{だい}一^{てん}天^{たう}道^{たう}さまの罰^{ばち}が當^{あた}らずには居^おりませぬ、昨^{きのふ}日^{このあ}も此^{この}近^{あた}
 傍^りの噂^{うはさ}を聞^きけば松^{まつ}島^{しま}さまは世^せ間^{けん}で評^{ひやう}判^{ばん}の方^{かた}、奥^{おく}さま持^もた
 うなら撰^より取^とり見^みどりに山^{やま}ほどなれど何^{どれ}方^{こと}もお斷^{こと}りで此^こ方^{なた}へのお
 出^{いで}は嬢^{ぢやう}様^{さま}の上^{うへ}にばかり日^ひの照^てりが違^{ちが}うか、何^{なん}といふお幸^{しや}福^{わせ}
 と焼^{やき}もちやいて羨^{うらや}みますぞや、そのお人^{ひと}に捨^すてられたらお前^{まへ}さま
 まあ何^{なん}と遊^{あそ}ばず、お泣^なきなさるはお腹^{はら}がたつか、お怒^{おこ}りになつて
 もよし、民^{たみ}は申^{まう}だけは申^{まう}ます、悪^わるくお聞^きき遊^{あそ}ばせば夫^それまで、
 さりとは方^{はう}圖^づのなきお我^{わが}まゝと思^{おも}ひ切^きつて呵^{しか}りつけしが是^これも主^{しゅ}

おも思ひの一部なり、もとよりお園に惡る氣のあるではなく唯おさな
 子ごひとの人ぎらひして、抱だかれるを嫌いやがり、あやされ、ば泣なくと同おな
 じく、何故なぜか其そのひと人に氣きが合あはず去さりとして格別かくべつに仇あだをして困こまら
 せんなど、念ねんの入りし憎にくくさでもなく、まこと世間せけん見みずの我わがま、
 から起おこりし處しよい爲なれば、言いはれるにつけて何なんと言いひ譯わけの理り由ゆうもな
 く、口惜くやしきか悲かなしきか恥はづかしきか無茶苦茶むちやくちやに泣ないて顔かほもあげぬ
 を、お民たみなほも何事なにことをかいはんとする折門をしかどにとまる例れいの車くるまの音おと、
 それお出いでなり今日けふこそはお優やさしく遊あそばせよ。

四

その園さまはどうなされた今日けふはまだ顔かほが見えぬと問とはれてまさかに、
 いま今までこれい／＼で次つぎの間に泣ないて居おられますとも言いひがたければ、
 せうく少々御不加ごふかげん※で、然しかしもう宜よろしう御座ござりませうほどに、まあお
 茶ちやを一つなど、民たみは其場をつくろひぬ。
 がくしまゆしはそこま學士眉を皺しはめて夫それは困こまつたもの、全体ぜんたいが健康じやうくといふ質たちでな
 ければ時候じこうの替かはり目めなどは殊ことさら注意ちういせねば惡わるるし、お民たみどの不ふ
 やうじよう養生やうじようをさせ給たまふな、さてと我われも急きうに白羽しらばの矢やが立たちて、遠ゑんほ
 う方させんへ左遷ことと事きが極きまり今日けふは御風ごふう聽いてうながらの御告いとまごひ別なり
 と譯わけもなくいへばお民たみあきれて、御串談ごじやうだんをおつしやりますな、
 いや串談じやうだんではなし札幌さつぽろの病びやう院あん長ちやうに任にんじられて都合つがふし次
 第だい明日あすにも出しゆつたつ立たせねばならず、尤もつとも突然だしぬけといふではなく斯か

うとは大底たいていしれて居おりしが、何か驚なにおどろかせるが苦くるしさに結局つまりいはねばならぬ事ことを今日けふまでも黙だまつて居おりしなり、三年ねんか五年ねんで歸かへるつもりなれども其そのほどは如何どうか分わからねばまづ當分たうぶんお別わかれの覺か悟くご、それにつけても案あんじられるは園様そのさまのこと、何なんの余計よけいの世話せわながら何故なぜか最初はじめから可愛かわゆくて眞實しんじつの處ところ一日見みぬも氣きになる位くらいなれど、さりとて何時いつ來きても喜よろこばれるでもなく、結局けつぐあれほど厭いややるものも氣きの毒どくなど氣きのつかぬでもなければ、如何どうかして天晴あつぱれの淑女そだに育そだて、見みたく、自惚うぬぼれの言いひ分ぶんと笑わらひ給たまはんが兎とに角かくけふ今日けふまで嫌いややがられに來きしなり、まづ學問がくもんといふた處ところが女おんなは大たい底ていあんなもの、理化學政りくわがくせいほう法ほうなど、延のびられては、お嫁よめさまの口くちにいよく遠とほざかるべし、第一だい皮相ひさうの學問がくもんは枯木かれきに造つくり花ばなし

とも同じにて眞心まことの人は悦よろこはぬもの、よしや深山みやまがくれでも天てん
 眞まことの花の色いろは都みやこ人ひとを床ゆかしがらする道理だうりなれば、此このうへは優ゆ
 美うの性せいをやしなつて徳とくをみがく様やうに教をしへ給へ、我われ此地このちに居ゐたり
 とて根ねからさつぱり談だん合かうの膝ひざにも成なるまじきが、これからはい
 よくお民たみどの大役たいやくなり、前門ぜんもんの虎とら、後門こうもんの狼おほかみ、右みぎにも左
 にも怕こわらしき奴やつの多おほき世よの中なか、あた美玉びぎよくにきずをつけ給たまふは、
 園そのさまにも言いひきかせたきこと多くあれど我わが口くちよりいはゞ又耳またみみ
 に兩手りようてなるべし、不思議ふしぎに縁ゑんのない人ひとに縁ゑんがあるか馬鹿ばからしき
 ほど置おいてゆくが嫌いやな氣持きもちと、笑わらつてのけながら調子てうしがいつも
 ほど冴さえては聞きこえず。
 散々さんさんのお民たみが異見いけんに少すこし我わが非ひを知しり初そめし揚句あげく、その人ひとは俄にわ

かに別れといふ、幼なき心には我が失禮の我まゝを憎くみて夫
 故に遠國へでも行かれるやうに悲しく、侘がしたれけれど障
 子一重を出る時機がなく、お民が最初に呼んで呉れし時すこし
 ひねくれてより拍子ぬけがして今更には馳け出しもされず、
 其うちにお歸りにならば何とせん、もう逢つては下さらぬかなど
 、敷居の際にすり寄つてお園の泣けるも知らず、學士はその時つ
 と起つて、今日はお名残なるに切めては笑ひ顔でも見せて給はれ
 とささり障子を明くれば、お、此處にか。

五

左様さうないてくれては困こまる、お民たみどのも同じやうに何なんの事ことぞ、もう
 逢あはれぬと言いふでもなきに心こゝろ細ほそき事こといひ給たまふな、園そのさま何なにも
 詫わびらるゝ事ことはなし、お前まへさまの事ことは宜よろしくお民たみが承しょう知ちして居お
 れば少すこしも心しん配ぱいの事ことはあらず、唯ただこれまでと違ちがひて段だん々と大お
 人ひとになり世間せけんの交際つきあいも知らねばならず、第一だいに六むづかしきは人ひと
 の機嫌きげんなり、さりとして諂へつらひの草履ざうりとりも餘あまりほめた話はなしではなけ
 れど處そこが工合ぐあいものにて、清せい淨じようなり無垢むくなり潔けつ白ぱくなりのお
 前まへ様さまなどが、右みぎをむくとも左ひだりを向むくとも憎にくくむ人ひとは無なき筈はずなれ
 ど夫それでは世よが渡わたられず、我われも矢張やはり其その中間なかまの一枚まい板いたにて
 使つかひ道みちが不向ふむきなれども流石さすがに年としの功こうといふものか少すこしはお前まへさ
 まより人ひとが悪わるるし、さりとして悪わるく成なり過すぎては困こまれど過く不ふ及きふ

の取^{とり}かぢは心^{こゝろ}一つよく考^{かんが}へて應^{おう}用^{よう}なされ、實^{じつ}の處^{ところ}出^{しゅ}立^{たつ}は明^あ
 さつて、支^{した}度^{たく}も大^{おう}方^{かた}出^で來^きたれば最^も早^{はや}お目^めにかゝるまじく隨^ず分^{ぶん}身^か
 後^{らだ}日^だ、軀^くをいとひて煩^{わづら}ひ給^{たま}ふな、此^{この}上^{うへ}にお頼^{たの}みは萬^{ばん}々^{／＼}見^み送^{おく}りなど
 して下^{くだ}さるな、さらでだに泣^なき男^{おとこ}の我^われ朋^{とも}友^{だち}の手^て前^{まへ}もあるに何^{なに}
 かをかしく察^とられてもお互^{たがひ}に詰^{つま}らず、さりながらお寫^{しや}眞^{しん}あらば
 一枚^{まい}形^{かた}見^みに頂^{いた}きたし此^{この}次^{つぎ}出^{しゅ}京^{けい}する頃^{ころ}には最^もはや立^り派^{つぱ}の奥^{おく}
 様^まかも知^しれず、それでも又^{また}逢^あつて給^{たま}はるか顔^{かほ}をのぞけば、膝^{ひざ}
 に泣^なき伏^ふして正^{せう}体^{たい}もなし、夫^それほど別^{わか}れるがお嫌^いやかと背^せを撫^な
 せられて黙^う頭^なづく可^か愛^{あい}さ、三^{ねん}年^め目の今^け日^{ふい}今^まさら寧^{むし}ろ
 きが増^ましなり。

柔^{やはら}かき人^{ひと}ほど氣^きはつよく學^{がく}士^し人^{ひと}々^{／＼}の涙^{なみだ}の雨^{あめ}に路^{みち}どめもされず、

今宵こよひは切せめてと取とらへる袂たもとを優やさしく振切ふりきつて我家わがやへ歸かへれば、お民たみ
 手ての物ものを取とられしほど力ちからを落おとして、よしや千里りばんりはなれると
 も眞實まことの親おや子こ兄けう弟だいならば何時いつ歸かへつて何どうといふ樂たのしみもあれど、
 ほんの親しん切せつといふ一筋すぢの糸いとにかゝつて居い身みなれば、遠とほざかる
 が最期さいごもう縁ゑんの切きれしも同じこと取とりつく島しまの頼たのみもなしと、我わ
 れ振ふりすてられしやうな歎なげきにお園そのいよく心こゝろ細ほそく、母は親おや
 の別わかれに悲かなしき事ことを知しつゝ、腸はらもみ切きるほど泣なきに泣なきしが今け
 日ふの思おもひは夫それとも變かはりて、親しん切せつ勿もつ体たいなし、殘ざん念ねんなど、い
 ふ感かん念ねんが右往うわう左往ざわうに胸むねの中なかを搔かき廻まわして何なにが何なにやら夢ゆめの心地こゝち、
 さりとて其夜そのよは寐ねらるゝところならず、強しひて床とこへは入いりしもの
 寐間ねま着きも着きかへず横よこにもならず、さてつく／＼と考かんへれば目め

の前に晝間の様々が浮かびて、我れは知らねど胸にや刻まれ
 し學士が言ひし詞一言半句も忘れず、歸り際は此袖をかく捉ら
 へて待つとし聞かば今かへり來んと笑ひながらに仰せられし被の
 お聲も最う聞くことは出來ず、明日からは車のおとも止まるまじ、
 思へば何故に彼の人のあの様に嫌やなりしかと長き袂を打かへし
 打かへし見る途端、紅絹の八ツ口ころろと洩れて燈下に耀やく
 黄金の指輪、學士が左の薬指に先のほどまで光りしものな
 り。

六

つぼ おも こずゑ はな 春 雨 一 夜 だ し ぬ け に こ れ は こ れ は と 驚 か
 苔 思 ひ し 梢 の 花 も 春 雨 一 夜 だ し ぬ け に こ れ は こ れ は と 驚 か
 る 物 な り 、 時 機 と い ふ も の 、 可 笑 し さ に は お 園 の 少 さ き 胸 に 何
 を 感 ぜ し か 、 學 士 が 出 立 後 の 一 日 二 日 よ り 爲 る 處 業 ど こ と な
 を と な
 く 大 人 び て 今 ま で の 様 に 我 ま 、 も 言 は ず 、 縫 は り 仕 事 よ み 書 の 外
 い ぜ ん ま み
 以 前 に 増 し て 身 を つ 、 し み 誘 ふ 人 あ り と も 人 寄 せ 芝 居 の 浮 き し 事
 あ し む
 に 足 も 向 け ね ば 、 折 ふ し は 遂 へ に 今 ま で 見 し 事 も な き 日 本 全 圖 な
 ど 、 い ふ 物 を お 民 が お 使 ひ の 留 間 の 間 に 繰 り 開 け て 居 る 事 も あ り 、
 し ん ぶ ん し う へ さ つ ぽ ろ ほ く かい だ う
 新 聞 紙 の 上 に も 札 幌 と か 北 海 道 と か 言 ふ 文 字 に は 逸 は や く
 め 目 の つ く 様 子 、 或 日 お 民 氣 が 付 い て 見 れ ば 右 の 指 に あ り 〳 と 耀
 や く も の あ り 。
 さ て も 秋 風 の 桐 の 葉 は 人 の 身 か 、 知 ら ね ば こ そ あ れ 雪 佛 の
 あ き か ぜ き り は ひ と み し け ん ぼ と け

堂だう塔とういかめしく造つくらんとか立り派つぱにせんとか、あはれ草くた臥びれもう
 けに成なるが多おし、文ぶん化くわとか開かい明めいとかの餘よく光わうに何なに事ごとも根ねか
 ら葉はから堀ほりかへして百ねん年ねんむかしの人ひとの心こゝろの中なかまで解かい剖ぼうする
 世よに、これしよくを職しよく掌しようの醫い道だうの妙めうにも我わが天てん授じゆの齡よはひは何どうも
 ならず、學がく士し札さつ幌ぽろへ趣おもきし歲としの秋あき、診しん察さつせし窒ちぶ扶すく斯わん患じや者に
 感かん染ぜんして、惜をしや三十路みそぢにたらぬ若わかざかりを北ほく海かい道だうの土つちに成な
 しぬ、風かぜの便たよりにこれきを聞ききしお園そのの心こゝろ。
 空うつ蟬せみの世よの中なかすて、思おもへば黒すみ染ぞめに袖そでの色いろかへるまでもなく、
 花はなもなし紅もみぢ葉ぢもなし、丈たけにあまる黒くろ髮かみきり拂はらへばとて夫それは見み
 る目めの菩ぼ提だい心しん、人ひと前まへづくりの後ご家けさまが處しよ爲いぞかし、うき世よ
 の飾かざりの紅べにをしろいこそ入いらぬ物ものと洗あらひ髮がみの投なけ島しま田だに元もと結ゆひ一

筋すぢきつて放はなせし姿すがた、色いろこのむ者ものの目めには又また一段だんの美びとたゝえて聳むこ
 にゆかん嫁よめにとらん、家名相續かめいさうぞくは何なにともすべしと言いひ寄よる人ひと一
 人ひとり二人ふたりならず、ある時とき學士がくしが親友しんいうなりし某それがし、當時たうじ醫學部いがくぶに有いうめ
 名いの教授けうじゆどの人ひとをもつて法かたの如ごとく言いひ込こみしを、お民上たみうへもな
 き縁ゑんと喜よろこびてお前まへさまも今いまが花はなのさかり散ちりがたに成なつては呼よん
 で歩行あるくとも賣うれる事ことでなし、大底たいていにお心こころを定め給たまへ、松島まつしまさ
 まに恩おんはありとも何なんのお束約やくそくがありしでもなく、よし有ありたり
 とも再縁さいゑんする人ひとさへ世よには多おほし、何處どこへ憚はゞかりのある事ことならね
 ばとて説諭せつゆせしに、お園そのにこやかに笑わらひて口先くちさきの約束やくそくは解とく
 にとかれもせん、眞まことの愛あいなき契ちぎりは捨すて、再縁さいゑんする人ひとも有あるべし、
 素もとより彼かの人ひとに約束やくそくの覺おぼえなく増まして操みさほの立たてやうもなければど、

どこ
何處とも知らず染みたる思ひは此身ある限り忘れ難ければ、萬一
かの教授さま達て妻にと仰せのあらば、形だけは参りもせん心
は容易くたてまつり難しと傳へ給へと、事もなく言ひて聞きいれ
る景色のなきに、お民いひ甲斐なしと斷念して夫れよりは又進
めずとぞ、經机の由縁かくの如し。

或る口の悪るきお人これを聞きて、扱もひねくれし女かな、今も
し學士が世にありて札幌にもゆかず以前の通り生やさしく出入
りをなさば、虫づのはしるほど嫌やがる事うたがひなしと苦笑
ひして仰せられしが『ある時はありのすさびに憎くかりき、無く
てぞ人は戀しかりける』とにも角にも意地わるの世や意地悪るの
世や。

をはり

青空文庫情報

底本：「文藝俱樂部 第六編」

1895（明治28）年6月20日

初出：「甲陽新報」

1892（明治25）年10月18日～25日

※初出時の署名は、「春日野しか子」です。

※変体仮名は、通常の仮名で入力しました。

※「ヅ」と「ズ」の混在は、底本通りです。

入力：万波通彦

校正：Juki

2013年10月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

経つくゑ

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>